

## 旧ロシア領事館建物調査票

令和3年(2021年)2月24日

作成 函館市文化財保護審議会

(1) 名称	旧ロシア領事館
(2) 所在地	函館市船見町17番3号
(3) 所有者	函館市
(4) 構造規模等	煉瓦造2階建 亜鉛メッキ鉄板葺 1階:428.12 m <sup>2</sup> 2階:253.90 m <sup>2</sup> 景観形成指定建築物等(函館市都市景観条例)
(5) 建築年	1908年(明治41年)
(6) 設計・施工	設計:リヒャルト・ゼール 施工:佐藤誠
(7) 建物の歴史	<p>1854年(嘉永7年)の日米和親条約締結により、箱館は下田とともに開港された。翌年には日露和親条約が締結され、1858年(安政5年)、初代領事ゴシケーヴィチが箱館に着任した。</p> <p>初代の領事館は1860年(万延元年)に現函館ハリストス正教会敷地内に建設されたが、1865年(元治2年)に隣接したイギリス領事館からの出火により類焼した。</p> <p>その後は臨時事務所が場所を定めず置かれていたが、ロシアの南下政策に基づく戦略的観点や露領漁業の活発化に伴い漁業基地としての函館の位置付けが高まったことから、1903年(明治36年)に領事館建設に着手し、翌年の日露戦争による中断を経て、1906年(明治39年)に2代目となる領事館が、現存する「旧ロシア領事館」と同所に建てられたが、翌1907年(明治40年)の大火により竣工からわずか8か月で焼失した<sup>1)</sup>。</p>

現在の建物（3代目領事館）は、1908年（明治41年）に再建された建物で、帝政ロシア末期に、同国の官費により建てられた領事館としては、わが国に現存する唯一の建造物となっている<sup>2)</sup>。

その後、この建物は、ロシア革命後の1925年（大正14年）にソビエト連邦の領事館として引き継がれ、太平洋戦争末期の1944年（昭和19年）に閉鎖された。

ロシア帝国との条約締結により、箱館には領事館や附属聖堂、病院などの西洋式の建築物が建てられ、さらに在留ロシア人により気象学・写真術・西洋医学<sup>3)</sup>といった先進的な文化が伝えられ、当市の近代化に寄与していたとともに、明治中期以降、露領・北洋漁業を主幹産業としていた当市にとって、査証の発給権を握る領事館と良好な関係を維持することは極めて重要であり、領事館は当市の政財界と領事との交流の場としても機能していた<sup>2)</sup>。

領事館閉鎖後の1964年（昭和39年）に函館市が建物を購入して改修工事を行い、翌年から約30年間、青少年の宿泊研修施設「函館市立道南青年の家」として年間1万人以上が利用<sup>2)</sup>していたが、1996年（平成8年）に道南青年の家が閉鎖された後は、函館市が活用方針の検討をしていた。

## (8) 建物の概要

幸坂に面する高台に立地したこの建物は、煉瓦造2階建、屋根は寄せ棟の亜鉛メッキ鉄板葺きとなっているが、建設当初は瓦葺きであった<sup>4)</sup>。

設計者は、明治政府の依頼で東京の官公庁建築のためエンデ&ベックマン建築事務所の全権委任者として来日し<sup>5)</sup>、その後、横浜に建築設計事務所を構えていたドイツ人建築家のリヒャルト・ゼール<sup>6・7)</sup>で、1903年（明治36年）にドイツに帰国する直前に設計が完了し<sup>8)</sup>、同年7月に建設工事に着手した。翌年に勃発した日露戦争により工事が中断したが、1906年（明治39年）6月に工事が再開、12月に竣工して執務が始められた。

しかし、翌1907年（明治40年）8月の大火により建物が焼失した<sup>8)</sup>ため、1908年（明治41年）に函館の佐藤誠が工事を請負い、ゼールの設計図のもと同年12月に再建されたのが現存する建物である<sup>9)</sup>。

外観は、イギリス積みの赤色煉瓦を基調とした建物で、1階は外壁隅角部の煉瓦表面を薄く削りモルタルを重ね白色塗装した石積風の意匠が印象的で、ドイツ・ネオ・バロック

様式<sup>5)</sup>の特徴をよく示している。2階は開口部の枠部を煉瓦面より若干突出させた上、モルタルで覆い白色塗装を施した独特なものである。

玄関ポーチは、溝彫りを持つ石柱の頭部に斗拱風の組物を施し、唐破風を載せるなど和風意匠<sup>10)</sup>も持つ。正面（東面）中央部の上方のペディメント廻りには、ハーフティンバー風の意匠やハンマービームを模したデザインも見られる<sup>11)</sup>。ペディメント下部と唐破風の下部には、紋章や国章を掲げる枠型のモールディングが残されている。

開口部は木製建具であるが、1階部分は、開口部廻りに切妻の庇とともに石造のまぐさや窓台が設置され、建具と同様に白色塗装<sup>4)</sup>を施し、赤色の煉瓦壁と特徴的なコントラストを生み出している。

函館港が一望できるサロンは、木製建具と格子状のガラス窓で開放感のある空間を構成している。西面の中央部は、手摺り部分にシンプルな半円アーチ<sup>12)</sup>が配されるなど、ネオ・ルネッサンス様式の特徴も見られる。

なお、現状の建物からは既に撤去されているが、写真資料<sup>13)</sup>によると、正面にはバルコニーやフラッグポール、ロシア語による文字プレートが設置されていたほか、寄棟屋根には棟飾りが、ペディメントにはうろこ状の意匠が確認できる。

内部は、キーストーンのあるアーチ梁が残っているほか、玄関ホールにはアカンサス模様を施した木柱や階段親柱がある。壁面や天井廻りには幾何学模様のモールディングや植物のオーナメント<sup>11)</sup>が漆喰で表現されている。また建築当時のものと思われる建具や木彫のオーナメントのほか、格天井や腰壁、またアール・ヌーヴォー風の照明器具<sup>14)</sup>など、往事の姿を想起させる内装や部材が随所に残されている。また、2階の天井裏の一部には、建築当時のものと思われる天井飾りも確認できる。

建築様式は、ドイツ・ネオ・バロック様式を基調として、ネオ・ルネッサンス様式や和風の意匠などを加えた混合様式である。

## (9) 評価

旧ロシア領事館は、帝政ロシア時代に同国の官費により建てられた、わが国に現存する唯一の領事館で、函館で36年間にわたって領事館の機能を果たしており、幕末期の開港に伴うロシア文化の発信や、明治期以降に近代函館の繁栄を支えた露領漁業など、函館における日ロ交流史を物語る遺産として、歴史的価値は高く、地域の特色を現すものである。

明治政府からの依頼で来日したゼールが設計した建造物のうち、現存するものは稀少であり、その多くは文化財となっている。また、明治期に外国人が設計し、函館の職人が施工した市内の建造物もわずかしか残っておらず、学術的価値は高い。

道南青年の家時代に外観・内部ともに改修されているものの、西洋建築を基調として和風意匠を取り入れた外観、建築当時の姿が想像できる内装が随所に残されており、意匠的・技術的にも優れている貴重な建造物である。

〔注〕

- 1) 函館市史通説編第3巻第5編第2章第8節3「函館とロシア・ソ連の関係」
- 2) もと道南青年の家（旧ロシア領事館）歴史的・文化的価値に係る調査報告書（令和2年）倉田有佳
- 3) 函館市史通説編第1巻第3編第5章第13節2「学芸」、3「衛生」
- 4) もと道南青年の家（旧ロシア領事館）外壁等改修費用積算調査報告書（平成28年）特定非営利活動法人はこだて街なかプロジェクト
- 5) 明治のお雇い建築家エンデ&ベックマン（平成元年）堀内正昭
- 6) ロシア領事館設計図（明治36年）ロシア帝国外交史料館所蔵
- 7) リヒャルト・ゼールの経歴ならびに建築作品について（平成14年）堀内正昭・山田利行  
またゼールが設計した文化財建造物は、下記のとおり。
  - ・明治学院記念館・1890年・東京・港区指定有形文化財
  - ・同志社クラーク記念館・1893年・京都・重要文化財
  - ・千葉教会教会堂・1895年・千葉・千葉県指定有形文化財
- 8) 在函館帝国領事館建設に関する建設委員会会議議事録（明治39年12月7日）ロシア帝国外交史料館蔵  
ゼールのドイツ帰国後は、同国人の建築家G・デ・ラランデが建設設計事務所の後継者となった。
- 9) 在函館ロシア帝国副領事館建設に関する契約書（明治41年4月7日）ロシア帝国外交史料館所蔵
- 10) 函館市西部地区の町並（昭和59年）函館市教育委員会
- 11) 世界の名建築解剖図鑑（平成25年）オーウェン・ホプキンス
- 12) 建築物を読みとく鍵（平成21年）キャロル・デイヴィッドソン・クラゴー
- 13) 函館市中央図書館デジタルアーカイブから  
古写真に写る正面のロシア語の文字プレートは「ロシア帝国副領事館」の意。  
РОССИЙСКО-ИМПЕРАТОРСКОЕ ВИЦЕ-КОНСУЛЬСТВО
- 14) 名建築の歴史図鑑（平成30年）オーウェン・ホプキンス

〔参考文献〕

- 角 幸博・監修 1997 『函館の建築探訪』函館建築研究会・函館の歴史的風土を守る会編
- 清水 恵・A.トリョフスビャッキ 1997 「日露戦争及び明治40年大火とロシア帝国領事館－在ロシア史料より－」『地域史研究はこだて（第25号）』函館市史編さん室編
- 清水 恵 2005 『函館・ロシア その交流の軌跡』函館日ロ交流史研究会
- 函館市史 都市・住文化編 1995 函館市史編さん室編
- 函館市文化財保護協会 1967 『はこだての文化財 古建築編』
- 『ロシアと日本－信頼構築への歴史的な道のり』 2008